



とがちの野生動物 コウモリ

Bats



国立大学法人 北海道国立大学機構
帯広畜産大学

野生生物保全管理技術養成事業

世界・日本・北海道のコウモリ

Bats in Various Regions

世界のコウモリ

最近の分類に従い哺乳類全種を5416種とすると、最も種類数の多いグループはリス・ネズミ・ヤマアラシの齧歯(ネズミ)目の2200種以上で、哺乳類全種の約4割です。翼手(コウモリ)目はそれに次いで種類数の多いグループで、1116種(他の説では1406種とも)と哺乳類全体の約2割を占めています。コウモリのグループは大きく分けると、オオコウモリやキクガシラコウモリの仲間を含むインプロキロプテラ亜目と、それ以外のコウモリ類のヤングキロプテラ亜目に分けられ、南極大陸以外の全ての大陸に分布しています。



韓国のクロアカコウモリ(日本には対馬に分布)

日本のコウモリ

日本では絶滅種と考えられている2種(オキナワオオコウモリとオガサワラアブラコウモリ)を除くと、これまで35種のコウモリ類が記録されていましたが、最近新たに奄美大島でシナアブラコウモリが確認され36種になりました。コウモリは日本に生息する陸棲哺乳類の中では最も種類数が多いグループです。果実などの植物食が中心で比較的暖かい地域(小笠原諸島・南西諸島)に住むオオコウモリ類2種以外は、すべて小型の食虫性コウモリ類で、キクガシラコウモリ、カグラコウモリ、ヒナコウモリ、オヒキコウモリの4科のコウモリ類がいます。



本州以南で最も一般的なアブラコウモリ(別名イエコウモリ)

北海道のコウモリ

アイヌの人々はコウモリをカパパ(皮のごとくうすっぱなもの)と呼びました。北海道には、本州以南の民家に生息し人と馴染みの深いアブラコウモリがいなかったため、北海道の人々にとってコウモリはあまり身近な動物ではありませんでした。しかし実は、北海道には多くのコウモリ類、特に森林性のコウモリが多数分布しており、近年ではアブラコウモリも函館などで確認され、クロオオアブラコウモリ、ヒメヒナコウモリ、コヤマコウモリなどの珍しい種も次々と道内で記録されています。



クロオオアブラコウモリ(中島宏章氏提供)

とちありのコウモリ

Bats live in Tokachi

キクガシラコウモリ・コキクガシラコウモリ

十勝地方では、標本などが存在し確実な採集記録などがあるコウモリ類は14種です。このパンフレットではその全ての種を解説します。キクガシラコウモリとコキクガシラコウモリは洞窟性ですが、廃トンネルや空き家でも生息が確認されています。キクガシラコウモリは、ナキウサギの生息する標高の高い場所にある岩礫地(通称がれ場)の石の間でも見られています。この2種類は音声が独特なので、バットディテクター(コウモリ探知機)を用いれば、音声だけで種の存在の確認が可能です。



洞窟で冬眠中のキクガシラコウモリ

モモジロコウモリ・ドーベントンコウモリ



背面が灰褐色で腹が白っぽいドーベントンコウモリ

北海道で種類数が最も多く、形態の似た種が多いため判別が難しいホオヒゲコウモリ属の2種です。モモジロコウモリの体毛は灰黒褐色で、下腹部から大腿部に白い毛が密生するためこの名で呼ばれます。普通種で洞窟性であり、廃トンネルもよく利用します。ドーベントンコウモリは日本では北海道のみに分布し、体毛は灰色がかった褐色で北海道のホオヒゲコウモリ属では最も淡い色合いです。川の水面すれすれを直線的に飛翔しながら採食します。樹洞や橋桁の下にコロニーをつくり、ホオヒゲコウモリやカグヤコウモリなど他の種類と混群を作ることがあります。

ホオヒゲコウモリ・ヒメホオヒゲコウモリ・カグヤコウモリ

ホオヒゲコウモリとヒメホオヒゲコウモリの2種は大きさもほぼ同じで、毛色なども似ており判別が最も難しいホオヒゲコウモリ属です。かつては背面の差し毛の金属光沢などで見分けていましたが、今では尾膜の血管の走行の形状で分けるのが一般的です。カグヤコウモリは先の2種よりはやや大きく、特に下腿が長いことが識別ポイントです。体毛はこげ茶色で、樹洞を主なすみかにしていますが、神社などで繁殖した例もあります。市街地などの平地から山間部まで広く分布し、河畔林に面した川や森林の林冠部など、さまざまな場所で採食するジェネラリストです。



背面がこげ茶色で腹面がやや淡い褐色のカグヤコウモリ

とがちのコウモリ

Bats live in Tokachi

キタクビワコウモリ・ヤマコウモリ・ヒナコウモリ

これらの3種類は、長く幅の狭い狭長型とよばれる翼を持ち、高速で直線的な飛翔を行うため、高い空の上や牧草地の上空など、開けて障害物のない場所で採餌を行うタイプのコウモリです。ホオヒゲコウモリ属に比べ大型で、特に北海道最大のコウモリであるヤマコウモリは、体重が60gを超えることがあります。ヤマコウモリは樹洞で営巣・繁殖し、小鳥用の巣箱にも稀に入ります。キタクビワコウモリは樹洞に営巣しますが、学校の体育館や倉庫などの人工構造物もよく使います。ヒナコウモリも、学校や民家、サイロなどの人工構造物によく繁殖コロニーをつくります。

日本では北海道だけに生息するキタクビワコウモリ



北海道最大でがっしりした体型のヤマコウモリ

ウサギコウモリ・チチブコウモリ



耳が巨大で眼や口も比較的大きいウサギコウモリ

これら2種類は大きな耳を持ち、他の種類との識別が容易です。ウサギコウモリは地表や葉の上、樹幹で動く虫の音を聞きつけ、ホバリングしながら大きな口で捕獲し、決まった場所まで運んで食べる習性があります。樹洞や洞窟が本来のすみかですが、神社などの人家にも入ります。チチブコウモリは発見された場所からこの名がつけましたが、北海道東部で比較的多く捕獲されています。体毛は黒く、左右の耳の根元が頭の上で結合しています。チチブコウモリの生態はよく分かっておらず、立ち枯れの木の樹皮の下や空き家で見つかっています。

テングコウモリ・コテングコウモリ

これらの2種類は翼の幅が広く、長さが短い広短型の翼を持ち、障害物を器用に避けながら採餌をします。コテングコウモリは林道や道路沿いの低い位置を飛びながら採餌する種類なので、ロードキルの比較的多いコウモリです。コテングコウモリは道路沿いのフキやオオイタダリの枯葉の中で休息していたり、雪の中で冬眠する面白い習性が知られています。テングコウモリの生態については分かっていないことも多いですが、洞窟や人家、コテングコウモリ同様に枯葉の中などで見つかっています。繁殖期にメスが小集団で木の梢付近にいることが確認されています。



管状に突出した鼻と銀色の刺毛が特徴のテングコウモリ

コウモリの保全

Conservation of bats

芽室町の門型カルバート



湧水域を保全するための門型カルバート

高規格幹線道路の芽室町北伏古の工事現場では、コウモリ類などの保護のため、いろいろな工夫がなされています。農耕地に囲まれた屋敷林の湧水池では7種類のコウモリが確認されました。そこを通過する道路の工事では、湧水とそこに暮らす生物の保全のため、従来のカルバートではなく特殊な門型カルバートで水の流れを確保しています。カルバート内にはバットボックスを複数設置し、これらはカグヤコウモリ、キタクビワコウモリによって10年以上繁殖用に利用されているほか、モモジロコウモリとドーベントンコウモリの混群にも一時的に利用されました。

帯広市と中札内村のボックスカルバート

同じく高規格幹線道路の帯広市から中札内村にかけての工事では、コウモリ類が移動に利用している防風林を道路の盛土が垂直に遮断するため、コウモリをこれまで通り通過させるように複数のボックスカルバートが設置されました。また、特に中札内村には樹上性動物用の木製の通路も併設しています。モニタリングの結果、ホオヒゲコウモリ属5種とキタクビワコウモリ、ウサギコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリによる通過利用が確認されたほか、木製の通路はクロテン、エゾリス、エゾモモンガとヤチネズミ類によって利用されていました。



樹上性動物用通路も備えたカルバート

バットボックス



樹洞の代替に設置したバットボックス

コウモリ類は巣箱などの人工物も利用します。ヤマコウモリ、ウサギコウモリ、テングコウモリなどは普通の小鳥用(モモンガ用)に入口径は4cmにしたもの)巣箱も使いますが、一般的にはコウモリ用のバットボックスは平たく、入り口が下についた構造です。十勝地方では、保全や研究のために用いたバットボックスを、モモジロコウモリ、ドーベントンコウモリ、カグヤコウモリ、キタクビワコウモリ、ヒナコウモリなどが利用したことが確かめられています。また木製のバットボックス以外にも、発泡スチロールの箱やレジャー用銀マットを筒状に巻いたものの利用も確認されています。



野生生物保全管理技術養成事業
<https://www.obihiro.ac.jp/biodiversity>



リーフレット作成協力、資料および写真提供(五十音順)

赤坂卓美・浅野浩史・浅利裕伸・家入明日美・石井健太・小野香苗・坂本さや香
島津敦子・高田優・立神雅宣・谷崎美由記・中島宏章・松本朋華・柳川久(文責)

2023/8/8